

社会教育・生涯学習研究所 監修
岡庭一雄・細山俊男・辻浩 編著
自治体研究社(本体1800円+税)

『自治が育つ学びと協働 南信州・阿智村』

書評

まえがき「小さな自治が育つ」学びと「協働」第1章「村をこえる住民の活動の広がり」1 地元野菜を使った「ごま産」2 小さい農家の協同を促す産業興隆公社 第2章 若い世代の参加と創造性の発揚
1 地域に生きる意味をつかむ若者たち 2 村の勢いの発信と復活事業 第3章 一人ひとりの人生の質を高める村をめざして 1 総合計画に盛り込まれた「目指す村の姿」2 憲法が書く地方自治 第4章 自治をこえる学びと協働 4-1 住民主体の村をこえる 1 第五次総合計画と住民主体の村政 2 協働と地域をこえる西地区 4-2 持続可能な地域づくりの手書で 1 人口問題と地域づくり 2 大分学ぶ地域の豊かさを手書で 4-3 住民の学びと公務労働 1 村をこえる住民の学びと自治体労働者 2 話し合いが地域をこえる人を育てる 4-4 「地域づくり」それは人びとが豊かに育つこと 1 阿智の地域づくりが問いかけること 2 阿智村の「地域づくり」実践の基本原理は「人間発達」おぼろ

長野県阿智村という名前を、いまや多くの人が知っているようになっていっている。というのも、マスコミで「日本一星空が見える村」、「満蒙開拓平和記念館がある村」、あるいは「村民劇の村」として、報道される機会が増えてい

るからである。だが、なぜそのような取り組みが展開されるようになっていっているかを知る人はあまりいないのではないだろうか。本書は、その謎解きを、7年間のフィールドワークに基づいて、社会教育・生涯学習研究所の皆さんと、前村長の岡庭一雄さんはじめ阿智村で生活し、村づくりに参加している住民や村職員との協同作業によって成し遂げた集団労作である。

評者 岡田知弘
(京都大学教授)



も設け、その取り組みの普遍的意義を読者が理解できるように工夫されている。

本書を通して、「すべての谷筋から子どもたちの声を消さない」として小学校、保育園、公民館を維持したり、移住者も含めて住民が食堂経営、村民劇、新聞づくりなどに積極的に関わったり、村職員が地域に入り広報の説明や住民と一緒に地区計画をつくる姿などが浮き彫りになる。これらを支える社会教育研究会はなんと半世紀の歴史を有する。試行錯誤しながらの、地方自治の最先端の取り組みと考える方には大いに励まされ、強い刺激を受ける。

編者は、岡庭村政によって確立され、現在の熊谷秀樹村政に引き継がれている阿智村政の特徴を、「小さな自治」と「協働」と「学び」にあると指摘している。ただし、これは地方創生政策によって国主導で行われている「小さな拠点」や、行政の下請けとしての「協働」でもない。村内各地での自主的な住民の自治的取り組みが集まった「住民主体の村」であることがポイントであり、冒頭の謎を解くカギもここにある。

さらに、本書では、自治体労働組合における自治研活動の重要性について、岡庭さんが後輩の村職員に熱く語りかけている。都市部の住民や議員、首長にとっても参考となる「気づき」が散りばめられており、ぜひ多くの人に読んでいただきたい一書である。

実は、わたしも2007年に、岡庭一雄さんと『協働がひらく村の未来』という本を自治体研究社から出版している。そのときは、岡庭さんへのインタビューを軸に、阿智村で村づくりに取り組んでいる皆さんへのヒアリングを行うことで、本をつくった。本書は、それから十年余りの間の阿智村での地域づくりの広がりやを叙述しているだけでなく、共同の調査研究体制の下で、わたしたちが触れられなかった分野や地域、あるいは婚活や移住してきた若い人たちの動き、小中高校の学校統廃合に対する村と村民の対応がきめ細かく掘り下げられている。また、具体的な取り組みの紹介にとどまらず、専門家のコメント欄